The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『国語』周語における気
Author(s)	竹田, 健二
Citation	中国研究集刊. 1989, 8, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61144
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『国語』周語における気

竹田健二

序言

先秦時代における気の諸相について、既に多くの研究がなされている。ところが、気が説かれている先秦時代の文献として『国語』を正面から取り上げたものはほとんどない（拙稿「『先秦時代における気』研究史」〈本誌『中国研究集刊』玄号、一九八六年〉参照）。しかしながら、『国語』には周語を中心として、しばしば気が説かれており、先秦時代における気の思想的発展を明らかにするためには、『国語』における気の検討も必要であろう。

もっとも、『国語』の成立に関しては未詳の点が多く、古くから問題があるとされてきた。しかし、カールグレンの語法上からの研究により、『国語』は『左伝』と並んで先秦時代の成立であること、その上、両書は先秦時代の諸文献の中でも特異な類似性を示していることが明らかにされて以来、『国語』の成立が先秦時代であることはほぼ定説化していると言ってよかろう。従って、先秦時代の気を検討する際に『国語』を資料として用いることには、何ら障害は無い。いや、むしろかなり古い、恐らくは春秋時代の思考をも伝える貴重な資料として、その内容を積極的に評価すべきであると考える。

本稿は、『国語』中の周語を中心としながら『国語』における気を検討し、それによって『国語』における気の思想を解明し、先秦時代における気の思想的発展を明らかにする手がかりを得ようとするものである。その際、周語を中心に検討を進めるわけは、『国語』の中でも、とりわけ周語に気が集中して説かれているからである。

本稿は、気をその存在する場所によって二つに分類して考え、第一章では天地自然の間の気を、第二章では人間の身体内部の気をそれぞれ分析し、第三章において両者の関係を検討する。

なお、『国語』の引用は、天聖明道本を底本とし、一部を公序本によって改めた。

第一章　天地自然の間の気

本章では、天地自然の間の気について分析する。先ず次に挙げる資料は、『国語』における天地自然の間の気の性格をよく示しているものとして注目すべきものである。

幽王二年、西周の三川　みな震ふ。伯陽父曰く、周将に亡びんとす。夫れ天地の気、（本来は）其の序を失はず。若く其の序を過つは、民　之を乱すなり（韋昭の『解』は「『民』と言ふは、あへて王を斥さざればなり」すなわち「幽王」を憚って「民」と表現し暗に幽王を指したとする）。陽伏して出づる能はず。陰迫りて烝る能はず。是に於て地の震ふ有り。今三川実に震ふ。是れ陽其の所を失ひて陰に鎮へらるればなり。陽失ひて陰に在れば、川源必ず塞がる。源塞がれば、国必ず亡ぶ。夫れ水土演ひて民用ふるなり。水土演ふ所無ければ、民財用に乏しく、亡びずして何をか待たん。昔伊・洛竭れて夏亡ぶ。河竭れて商亡ぶ。今周の徳、二代の季の若し。其の川源又塞がり、塞がれば必ず竭る。夫れ国は必ず山川に依る。山崩れ川竭るるは、亡の徴なり。川竭れば、山必ず崩る。若し国亡べば、十年を過ぎず。数の紀なればなり。夫れ天の棄つる所、其の紀を過ぎず、と。（周語上）

これは、西周の都である鎬京付近の三川、即ち涇水・渭水・洛水の流域で地震が発生した時に、周の大夫である伯陽父が行なった予言である。伯陽父は、この地震が今後河川の水源の閉塞・河川の枯渇・山の崩壊といった異常現象を引き起こすこと、更にそうした異常な現象が人々の生活の基盤である農耕に大きな打撃を与えるため、社会は混乱し、十年以内に周が滅亡することを予言している。

この予言では、地震を始めとする一連の異常な現象が、人間界と無関係に発生する純粋な自然現象とは捉えられていない。この地震発生は、人間（その代表が王）の不徳が原因となって発生したとされている。

また、伯陽父は、周が十年以内に滅亡すると予言した根拠について、「十」というのは「数の紀」であり、「天の棄つる所」は「其の紀を過ぎ」ないからだ、と説明している。このことは、伯陽父が周の滅亡を「天の棄つる所」と位置付けていることを意味している。伯陽父にとって、異常現象によって人間が様々な損害を被り、遂には国家が滅亡することは、不徳の人間が自ら招いた結果であるだけでなく、同時に、天がその国家の命運を見捨てたということでもあったのである。

以上のことはいずれも、この伯陽父の予言が、不徳の人間（為政者）に対して人格神的天、即ち上天・上帝が懲罰を下すという、強烈な天人相関の思想を基盤としたものであることを示している。地震に始まる一連の異常現象の結果として人間が被る様々な損害は、人間に対して上天・上帝が下す懲罰なのである。「天地の気」について検討する上で、それがこうした強烈な天人相関の思想に基づく予言の中で説かれているということは見逃せない。

それでは、この「天地の気」とは一体いかなるものなのであろうか。この予言において、伯陽父は、「天地の気」は本来「その序を失」うことなく、或る一定の秩序を保って存在すべきものと説く。しかし「民之を乱す」こと、即ち人間（その代表である王）が何らかの不正を働くことによって「天地の気」は「其の序を過つ」こともあり得るのであり、そうした「天地の気」の秩序の乱れ（後述するようにここでは陰陽の気の乱れ）こそが、この度の地震発生の原因なのである。先に述べたように、この地震は様々な異常現象を引き起こし、それによってもたらされる損害は上天・上帝からの懲罰に外ならなかった。従って、この「天地の気」には、その本来の秩序を乱す〈人間の不徳・不正〉と、それに対応して人間に下される〈上天・上帝の懲罰〉とを、結びつける機能があると考えられる。

それだけではない。この伯陽父の予言に従えば、人間が不徳・不正であることなく、従って気の秩序が本来の秩序のまま安定しておれば、地震などの異常現象は発生せず、当然、人間は何ら損害を被ることなく、その生活は安定し、国家も安泰ということになるはずである。このように人間社会が安定した状態を保っているということは、上天・上帝が人間に懲罰を下すことがなかったというだけでなく、人間に対して上天・上帝が福祿をもたらしていると言い得よう。とすれば、「天地の気」には、〈人間の望ましい行為・あり方〉と〈上天・上帝の福祿〉とを結びつける機能もあると考えられる。

即ち、伯陽父の説く「天地の気」は、人間（その代表である為政者）がその秩序を乱すか否かによって、人間に対して上天・上帝からの懲罰が下されるか、それとも福祿が下されるかを決定するものなのである。換言すれば、それは人間と上天・上帝との交感を成立させる、天人相関の媒介者である。

ただし、この「天地の気」（あるいはその秩序）に天人相関の媒介者という機能が備わっている根拠について、伯陽父は何ら触れていない。恐らくそれは、「天地の気」が本来保つとされる秩序自体が、そもそも世界の主宰者たる上天・上帝によって設定されたと考えられていたからに外なるまい。「天地の気」のあるべき秩序がそもそも上天・上帝によって設定されたものであるからこそ、その秩序を乱す人間の行為は上天・上帝の意志に背くものであり、当然懲罰が下さるべきである。また、人間がその秩序を乱さずにいることは、上天・上帝の意志に適うことであり、福祿がもたらされて当然なのである。

それでは、「天地の気」が本来保つべきとされる秩序とは、どのようなものなのであろうか。

第一に考えられるのは、陰陽の秩序である。もちろん「陰」「陽」が気の一種であるかどうかについては慎重に考えなければならないが、「天地の気」の乱れを問題としている文脈から言えば、この伯陽父の発言における陰陽は「天地の気」の一種であろう。後述するように、周語においては宣王即位の条（周語上）に「陽気」という語句の用例もあり、ここでの陰陽も気

の一種と考えられる。

伯陽父は、地震が発生する一般的な過程、あるいは今回の地震が発生した過程、更にはこの地震と周の滅亡との関連について、「陽伏して出づる能はず。陰迫りて烝る能はず」・「今三川実に震ふ。是れ陽其の所を失ひて陰に鎮へらるればなり」・「陽失ひて陰に在れば、川源必ず塞がる」と説明する。ここでの陰陽は、陰は「鎮」え、陽は「烝る」もの、つまり、本来陽は上昇し、陰は下降するものなのである。即ち、陰陽の気のあるべき秩序は、それぞれが天地間を上下に昇降することと考えられていたし、地震の発生原因は、その昇降運動が妨げられ、陽気が陰気によって押えつけられたことにあったのである。

しかし、「天地の気」の秩序は、全て陰陽の上下関係だけで説明されているわけではない。

晋聞く、古の民に長たる者は、山を堕たず、藪を祟くせず、川を防がず、沢を竇らずと。夫れ山は土の聚なり。藪は物の帰なり。川は気の導なり。沢は水の鍾なり。夫れ天地成り、而して〔土を〕高きに聚め、物を下（藪沢）に帰し、疏して川谷と為し、以て其の気を導き、汙澣（低湿地）に陂塘（韋昭の注「水を畜ふるを陂・塘と曰ふ。」）し、以て其の美を鍾む。是の故に、聚は陁崩せず、而して物は帰する所有り。気は沈滞せず、而も亦た散越せず。是を以て民生きては財用有り、而して死しては葬る所有り。（周語下）

霊王二十二年、穀水と洛水との氾濫で王宮が破壊されようとしたので、霊王が川を堰き止め王宮を守ろうとしたところ、太子の晋がその中止を諫言した。これはその諫言の一部である。ここで「古の民に長たる者」の理想的な政治の下における、あるべき天地自然の間の気の秩序として考えられているのは、先ず「気の導」、つまり気が流動するルートである川を伝って、天地の気が流れ下る、そして流れ下った先の沢において拡散せぬように蓄えられる、というものである。

ただし、この太子晋の発言では、「水の鍾（あつまるところ）」である沢と気との関係について直接的には述べられていない。しかし、川が「以て其の気を導」き、また沢や汙澣（水の溜った低地）が「以て其の美を鍾む」るが故に「気は沈滞せず、而も亦た散越」しないのであるから、川を流れる気と沢の水とは結局同じものであり、それは共に「水気」とでも呼ぶべきものであると考えられる。このことは、同じ霊王二十二年の条の太子晋の発言に、「水に沈気無し」との表現が見られることからも言えよう。従って、水気が川を流れ下り、そしてそれが沢において拡散せぬように蓄えられるというのが、天地自然の間の気のあるべき姿として考えられていた秩序なのである。

しかし、それだけではない。川と沢とに気の秩序が認められるのであれば、それらと対にされている「土の聚」たる山、及び「物の帰」たる藪（水の無い沢、即ち低地）の両者も、当然気の秩序に組みこまれているに違いない。恐らく、「土の聚」の「土」とは「土気」のことであろう。後述するように、宣王

即位の条（周語上）には、「土気震発す」と、「土気」という語句の用例が見られる。周語においては、「水」だけでなく、「土」も気の一種と考えられていたに違いない。従って、土気の聚集した山が「堕た」れることなく高い状態であり続け、一方藪は「崇く」されることなく低い状態であり続けることこそが、土気のあるべき秩序であったものと考える。

以上のように、天地自然の間の気の秩序は、先に見た陰陽の気の上下関係だけでなく、水気と土気とで説明されることもあるのである。

周語において、「天地の気」の秩序に陰陽と水土との二系統考えられていたことは、更に次に挙げる資料からも言える。

古は、太史、時に順ひて土を覘る。陽燀く憤盈し、土気震発し、農祥晨正し、日月天廟に底れば、土乃ち脉発す。時に先んずること九日、太史稷に告げて曰く、「今自り初吉に至り、陽気俱に蒸り、土膏其れ動かん。震かず渝はらざれば、脉其れ満眚し、穀乃ち殖せず。」と。（周語上）

この引用文は、即位した際に農耕の儀礼を執り行なわなかった宣王を諫める、虢の文公の発言の一部である。これによると、太史、即ち歴史官は、その職務として、①「陽」が「燀く憤盈」しているか、②「土気」が「震発」しているか、ということを観測し、③「農祥」つまり房星が、「晨正」即ち早朝に正しい位置にあるか、④「日月」が「天廟」つまり営室の位置にあるか、という天体観測の結果と合わせ、「土」が「脉発」する時期、つまり立春の日を予知するとされている。

太史が行なう観測の対象のうち、①の「陽」については、太史が観測結果を稷に報告する際「陽気俱に蒸り」と述べることから、これは陽気にまちがいない。とすれば、立春の日を予知するため、太史は天体の観測（③・④）の他に、①陽気と②「土気」との二方面から、気を観測するということである。このことは、「天地の気」の秩序に陰陽と水土の二つの系統が考えられていたことを示している。

以上、『国語』周語における気のうち、先ず天地自然の間の気について検討した。その結果、この天地自然の間の気は、天人相関の媒介者に外ならなかった。そして、恐らく人格神的天である上天・上帝によって設定されていたその秩序は、一元的な捉え方がなされておらず、陰陽と水土の二系統が考えられていたのであろう。

第二章　人間の身体内部の気

本章では、人間の身体内部の気について分析する。

周語における人間の身体内部の気としては、先ず血気を挙げることができる。周知の通りこの血気は、『論語』・『左伝』・『荀子』等、先秦時代の思想を伝える多くの文献中に見出すことができる概念であるが、周語においてもやはり説かれている。

夫れ戎狄は、冒没輕儳（礼のないさま）、貪りて讓らず。其の血気治まらざること、禽獣の若し。其の適たま来たり

て班貢するに、馨香嘉味を俟たず。故に諸を門外に坐らしめ、而して舌人（官名）をして体もて之に委与せ使む。

（周語中）

随会が晋侯の使者として周を訪問した時、宴席に「毀折」、即ち調理され細かく切られた料理が出された。そこで随会がその理由を尋ねたところ、周の定王は、そうすることが礼に則ることなのだと答えた。これはその定王の発言の一部である。戎狄は礼を知らぬ野蛮人であり、「血気治まらざること、禽獣の若」く粗野であるから、彼等には毀折ではなく、丸ごとの「体」の料理を出す。しかし礼を備えた中華の人間に対しては、そうした料理を出すわけには行かないのである。

この、戎狄は「血気治まらざること、禽獣の若」きであるという主張には、礼を備えた立派な中華の人間であれば、当然血気が治まっているとの前提がある。即ち、この血気は、本来、礼の下では或る秩序に従い治まっているべきものなのである。血気のこうした性格は、先に見た天地自然の間の気の性格と共通する。

もちろん、周語には血気以外の身体内部の気も説かれている。

服物は昭庸、采飾は顕明、文章は比象、周旋は序順、容貌崇有り、威儀　則有り、五味　気を実たし、五色　心を精にし、五声　徳を昭らかにし、五義　宜を紀す。（周語中）

この資料は先の資料に続く個所で、定王が礼の整った状態について説いている部分である。ここでは、「五味気を実た」すと説かれ、食物の摂取には人間の身体内部の気を充足する働きがあるとされている。

周語においては、身体内部の気と食物との両者を関連づける思考が、他の部分でも見られる。

夫れ耳は和声を内れ、口は美言を出し、以て憲令と為して諸を民に布く。之を正すに度量を以てし、民は心力を以て之に従ひて倦まず、事を成して弐はらざるは、楽の至りなり。口　味を内れ、耳　声を内れば、声味　気を生ず。気　口に在りては言を為し、目に在りては明を為す。言は以て名を信にし、明は以て動を時にす。名は以て政を成し、動は以て生を殖す。政　成り生殖するは、楽の至りなり。若し視聴和せず、而して震眩すること有れば、則ち味入りて精ならず。精ならざれば、則ち気　佚す。気　佚すれば、則ち和せず。是に於て狂悖の言有り、眩惑の明有り、転易の名有り、過慝の度有り。令を出して信ならず、刑政放紛し、動　時に順はざれば、民は拠依無く、力むる所を知らず、各おの離心有り。上　其の民を失ひ、作せども則ち済らず、求むれども則ち獲ず。其れ何ぞ以て能く楽ならん。

（周語下）

この文は、無射の鐘とその覆いの大林を造ろうとした景王に対して諫言した単穆公の発言の一部である。これによれば、人間が食物や音声を口や耳から摂取すると、それによって体内に「気を生」じる。もっとも「無から生じる」のではなくて「集

まり生じる」の意であろう。そのようにして発生した気は、「口に在りては言」、つまり言語となり、また「目に在りては明」、つまり視覚による認識能力となるのである。先の引用文では、「五味」によって体内の気が充足されるとあったが、その体内の気は、実はそもそも「味」や「声」によって体内に発生するものだったのである。

ここで重要なのは、身体内部の気には、人間の発する言語、および視覚による認識能力を生み出す作用があるとされている点である。この身体内部の気は、人間の精神的作用と深く関わるものであり、かつ人間の外界に対する働きかけとも密接に関連するものであったのである。

またこの気は、人間の視聴覚が乱されてしまうと「佚」してしまう。即ち、「視聴和せず、而して震眩すること有れば」、気は身体内部に定着することができずに（先の「集まり生じる」のとは逆に）散佚してしまい、従って気の作用は発揮されず、正しい言語を発したり、正しく物事を認識することが不可能になるのである。身体内部の気を正常に作用させるには、音楽を整えるなどして視聴覚を調和させなければならない。つまり、或る一定の秩序の下に治めておかなければならないのである。もちろん、視聴覚を整えるかどうかは人間自身の問題である。景王のように、不必要でかえって損害をもたらす鐘を鋳造するという不正を働き、音楽を乱すならば、当然視聴覚は乱され、気も正常には作用しない。

以上、天地自然の間の気に続き、周語における身体内部の気について述べた。その結果、身体内部の気には、人間の言語や認識能力を生み出す作用があった。そしてそれ自身は、食物や音声が人間の体内に摂取されることによって体内に集まり生じ、また充足された。ところが、こうして発生した気も、その人間が不正を働いて視聴覚を乱してしまえば散佚してしまい、その作用が発揮されなくなってしまうものだったのである。

第三章　天地自然の間の気と人間の身体内部の気との関連

本章では、周語における天地自然の間の気と人間の身体内部の気との関連について検討する。

両者の関連について特に注目すべき点は、両者とも、人間の側の不徳・不正によってその本来のあるべき姿が乱されてしまうと、人間が損害を被ることになるという点である。天地自然の間の気は、陰陽の気、もしくは水土の気の形で或る秩序の下にあるが、その秩序が破壊されると、地震などの異常現象が発生し、人間は様々な損害を被り、ひいては国家滅亡という事態に及んだ。一方、身体内部の気も、人間がその視聴覚を乱すような不正を働くと、その気が散佚してしまい、その本来の作用が発揮されなくなり、その結果その人物の言語能力や視覚による認識能力が、正常には作動しなくなるのである。

このように非常によく類似した性質を持つ両者は、恐らくは結局同一のものであると考えられる。

このことは、特に音楽との関係についてみれば明白である。先に述べたように、人間の身体内部の気がその作用を発揮するには、音楽が正しく整えられていなければならなかった。つまり、音楽が正しく整えられていてこそ、身体内部の気は本来のあるべき秩序を保つことができたのである。ところが、天地自然の間の気も、同じく音楽が正しく整えられてこそ、その秩序が保たれるとされているのである。

物其の常を得るを楽極と曰ふ。極の集まる所を声と曰ふ。声応じ相ひ保つ（韋昭は「保」を「安んず」と注す）を和と曰ふ。細大踰えざるを平と曰ふ。是の如くにして之が金を鋳、之が石を磨き、之が糸木を繫け、之が匏竹を越ち、之が鼓を節して之を行なひ、以て八風を遂はしむ。是に於て気に滞陰無く、亦た散陽無し。陰陽序次ありて、風雨時に至り、嘉生繁祉し、人民和利して、物備はりて楽成り、上下罷れず。故に楽正と曰ふ。（周語下）

この文は、先に引用した単穆公の発言に連なる部分である。単穆公の諫言を結局聞き入れなかった景王は、その後同じ問題について音楽官である伶州鳩に意見を求めた。それに対する伶州鳩の答えの一部が上引の文である。

ここで伶州鳩は、整えられた楽器によって演奏される、調和のとれた、しかも平正な音楽であってこそ、「気に滞陰無く、亦た散陽」が無い状態、つまり気の秩序が正しく保たれた状態になると説いている。ここでの気は、続けて「陰陽序次ありて、風雨時に至」るとされていることから分かるように、直接的には風雨などの自然現象に関わる天地自然の間の気であり、人間の身体内部の気ではない。このように、正しい音楽の下でこそ本来のあるべき姿を保つという、人間の身体内部の気に見られた性質は、天地自然の間の気にも備わっていたのである。

従って、天地自然の間の気と人間の身体内部の気とは、その存在する場所によって一応の区別がなされるけれども、実は同一のものであると考えられよう。即ち、声・味によって体内に身体内部の気が発生するということは、天地自然の間の気が、声・味の形を通して人間の体内に摂取されるということであり、天地自然の間の気、声・味、身体内部の気の三者は、それぞれが世界を遍く運動する気の一つの表われ方に過ぎない。

天地自然の間の気と人間の身体内部の気とが結局同一のものであることは、天地自然の間の気が備えていた天人相関の媒介としての性質を、特に為政者については、身体内部の気も備えていると考えられることからも言い得よう。即ち、先の単穆公の発言をふりかえってみるならば、景王が無射・大林を鋳造して自らの視聴覚を乱せば、王の体内の気はその本来のあり方を失って正しく作用せず、従って王には「以て名を信に」すべき言、また「以て動を時にす」べき明が備わらなくなる。故に王の政治は乱れざるを得ず、その結果「其の民を失」うことになり、国家が滅亡に瀕するのである。

このように、気がその本来のあり方を失う事によって国家滅

亡という大損害がもたらされる点においては、天地自然の間の気を乱したがために地震が発生し、国が滅んだ幽王の場合と、今の景王の場合とは、何ら変わるところがない。即ち、身体内部の気を乱すことによってもたらされる損害も、為政者にとっては、上天・上帝からの懲罰に外ならないのである。天地自然の間の気と同様、その身体内部の気の秩序を乱すことも、上天・上帝の意志に反することであり、それを犯せば、将来必然的に上天・上帝からの懲罰たる損害を被らなければならなくなるのである。

結　語

周語においては、気を中心とした下記のような世界観が存在すると言えよう。即ち、世界の主宰者たる上天・上帝は、天地間のあらゆる事象の本来あるべき姿、つまり世界の理想的なあり方を、気が或る秩序を保って存在している状態として設定した。人間（その代表が王）がその秩序をよく守っている限り、世界は安定し、人間社会は繁栄し得る。けれども、もし人間が気の秩序を乱す不正を働けば、上天・上帝が予めその気の秩序に仕組んでいた因果律により、その人間は上天・上帝の下す懲罰であるところの損害を自動的に被ることになる、というものである。

気が人格神的天と人間とを結びつける媒介者として機能するこうした世界観は、換言すれば、世界のあらゆる事象は全て気によって構成されているとする世界観である。これは原初的「気の思想」であると言って良かろう。

ただし、ここで言う気の思想は、既に見てきたように個物の生成や死滅を気の離合集散で説明するものとは異なる。「気は沈滞せず、而も亦た散越せず」などの表現から、周語における気も離合集散すると考えられていたと思われるものの、周語ではそうした気の離合集散と個物の生成・死滅とは、直接まだ十分には結びつけられてはいない。

また、陰気と陽気と、あるいは水気と土気との関係について、明確でない部分が多い。陰陽の気が上下の昇降関係にあることは先に見た通りだが、上昇した陽気や下降した陰気がその後どうなるのか、川を流れ下り沢に蓄えられた水気の行方がどうなると考えられていたのか、そもそも水気と土気とに直接的な関係があったのかどうか、こうした点について、周語は明確に述べていない。このことは、周語に見られる気の思想が、後の陰陽説や五行説のような理論的整合性をいまだ備えていない、古い時代の思想であることにその原因があると考えられよう。

周語における気が天人相関の媒介という性格を持つものであることについては、従来ほとんど注目されていなかった。しかしながら、このことは、先秦時代における気の思想的展開を解明する上で、重要な意味を持つと考える。そうした思想史的発展における位置づけ、あるいは気の思想の担い手の問題については、今後の課題としたい。